■日　時：２０２０年８月１６日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「聞く耳のある者は聞きなさい。」
■聖　書：マルコによる福音書第４章１節－２０節
■讃美歌：200「小さいひつじが」520「主よ、こころみ」

お早うございます。

75 回目の第二次世界大戦終結の時を迎えました。又私たち日本にとっては 75 回目の敗戦を覚える時です。

昨日 8 月 15 日（土）は、千鳥ヶ淵戦没者墓苑で行われている、キリスト者の平和祈祷会に行って来ました。午前 7 時から始まるので、朝 5 時半に教会を出ましたが、約 100 名の方々によって礼拝が守られました。いつもは、グループに分かれて平和のために祈りを捧げるのですが、コロナの問題のためかグループの祈祷会はなく、それぞれが黙祷をもって礼拝は終わりました。

墓苑からほんの数百メートル離れた所に、靖国神社があります。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑と靖国神社。戦争犠牲者を弔っている二つの施設ですが、先の 310 万もの犠牲者を生み出したアジア太平洋戦争をどのように受け止めて建てられているかについては、同じではないように思います。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠るのは、1931 年に始まる日中戦争からアジア太平洋戦争敗戦に至る 1945 年までの間、国外で亡くなった軍人や民間人およそ 35 万 8 千の人々です。彼らは、身元不明、あるいは引き取り手のいない人々です。

一方、靖国神社には、明治以降、国のために殉じたと見做された人々が神とされ、246 万 6 千の人々が祀られています。私の妻の叔父にあたる方も、靖国に祀られている一人です。

同じ戦争犠牲者であっても、一方は名も知られぬまま眠り、他方は、英霊として靖国神社の神とされる。政府の扱い方は明らかに違うように思うのです。

毎年 8 月 15 日前後になると、大挙して靖国参拝を行う政府与党を中心とした政治家たちがいます。しかし、この千鳥ヶ淵戦没者墓苑に葬られている名も知れない人々を、毎年忘れずに参拝する政治家はいるのでしょうか。聞いたことはありません。

私は、政治と宗教は厳しく分けなければならないとする政教分離の原則を堅持するためにも、戦争で犠牲となった人々は全て、身元が分かる分からないにかかわらず、無宗教の施設に葬り、そこは絶対非戦の決意を表わす象徴的な場所として行ければと思うのです。

75 年の月日が経ちました。

私たちの教会には、なお、戦争の記憶を持っている方が何人もいます。

その経験を、どのようにしたら後の世代に伝えて行けるのでしょうか？
私は、戦後生まれですから、戦争の記憶はありません。しかし、かろうじて、戦争を経験した両親の話しから、あるいは母が書き残した記録から、戦争とは何かを知ることが出来ます。その中に、満州のチチハルから、幼い二人の姉を連れて引き揚げて来た記録があります。その記録を読むと、1歳と2歳の姉を連れて、最後の引き揚げ船に乗って生きて帰れたことは、ただ奇跡としか言いようがありません。
私は、この場にいらっしゃる70代80代の方や、そのご両親も、私の母と同じような戦争の悲惨さを経験して来られたと思います。
戦後75年、日本は一度も戦争をしていません。しかし、改めて考えると嘘のようですが、明治以降敗戦までのほぼ同じ期間（77年）、日清戦争に始まり、日露戦争、第一世界大戦、日中戦争、第二次世界大戦と、日本は次々に他国と戦火を交え、まるで、戦争をするために国があったと言う感すらするのです。

それでは、この平和を、次の世代にかけがえのない贈り物として手渡すために、私たちに何が出来るでしょうか？
それはやはり文字として残すことです。一人ひとりが戦争への思いや経験を文字として残すこと、今ならまだ可能な、私たちに与えられた最後の仕事かも知れません。

今日与えられた聖書の御言葉を見てまいりましょう。
良く知られている譬話しです。

１：イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。
２：イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。

マルコは、イエス様の所に、「おびただしい群衆」が集まって来たことを記しています。
ただに多いのではなく、異常なほど多くの人々がイエス様の話しを聞きにやって来ました。

３：「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。

種蒔きの風景を思い起こします。
祈祷会でも語られていましたが、ミレーの「種まく人」の絵を思い出します。
すると、蒔かれた種の行く末を、イエス様は4つの例を挙げて語ります。

第１の種です。４節。

４：蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。

道端、即ち人々によって踏み固められて硬くなった土の道端です。そこは、土が固すぎて種を受け入れる事は出来ません。即ちイエス様が語られる福音を受け入れることの出来ない人を意味しています。踏み固められて硬くなった土地とは、先祖伝来の宗教や風習、伝統や価値観に縛られ、御言葉を受け入れることの出来ない人です。

次の５節６節です。

５：ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。
６：しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。

「石だらけで土の少ない所」と訳されていますが、より正確には、下が岩地で、その上に浅く土がかぶさっている情景です。土があるので芽は出るのですが、下が岩のため根を張ることは出来ず、強い日差しを浴びて枯れてしまったと言うのです。
芽が出るとは、御言葉を聞き、初めは喜んで受け入れるのですが、岩に妨げられて根が張れない、即ち福音がその人自身の生き方にまで深く及ぶことなく、時間と共に最初の感動は無くなり、福音から離れて行く人を意味します。

そして、７節です。

７：ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。

当時のパレスチナでは、畑を耕す時に、最も苦労したのが茨でした。乾燥地であるため、水が無くても育つ棘のある植物が少なくなく、茨やあざみなどの雑草がその代表的なものでした。種を蒔くために、これらの雑草を刈り取ります。しかし、根は残したままで刈り取るので、すぐに又生えて来るのです。
この譬は、御言葉を受け入れるが、その後の信仰生活や教会生活の中で、「茨が伸びて覆いふさぐ」、即ち信仰を全うするのに困難な出来事が襲ったり、富の誘惑に遭うなどして、信仰から遠ざかってしまう人です。
このような現実がある一方、８節９節です。

８：また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは30倍、あるものは60倍、あるものは百倍にもなった。」

９：そして、「耳のある者は聞きなさい」と言われた。

「良い土地に落ち」た種ですが、この良い土地とは、実は私たちのことです。
御言葉を受け入れた私たちは、その御言葉を他の人々にも伝え、30 倍、60 倍、百倍もの人々に福音を宣べ伝える者となると言うのです。
ところで、種が落ちたと言う、この「落ちた」と言う動詞ですが、「道端に落ちた」「土の少ない所に落ちた」「茨の中に落ちた」と言う箇所では単数形が使われ、「良い土地に落ちた」の箇所では複数形が使われています。つまり、イエス様が蒔かれた種、即ち福音は、ほとんどが良い土地に落ち、他の所に落ちるのは数少ないのだとマルコは記します。「おびただしい群衆」と言う表現にしても、イエス様が群衆を受け入れていることを示唆しています。
10 節から 12 節。

１０：イエスが一人になられたとき、12 人と一緒にイエスの周りにいた人たちとがたとえについて尋ねた。
１１：そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。
１２：それは、
『彼らが見るには見るが、認めず、
聞くには聞くが、理解できず、
こうして、立ち帰って赦されることがない』ようになるためである。」

11 節にある「外の人々」は、ユダヤ人以外の異邦人を指しています。
この箇所は、全体として厳しい内容です。
特に 12 節は、イザヤ書第 6 章 9 節、10 節の引用ですが、ヘブライ語の原典をそのまま訳したのではなく、当時日常使われていたアラム語訳からギリシャ語に翻訳したもののようです。いずれにしても、異邦人に対して、神の国の秘密を知る事の困難さが示されます。

１３：また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。
１４：種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。
１５：道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。
１６：石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、
１７：自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。

１８：また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるのである。この人たちは御言葉を聞くが、
１９：この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。
２０：良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は 30 倍、ある者は 60 倍、ある者は 100 倍の実を結ぶのである。」

13 節以下から最後の 20 節までですが、13 節の叱責は、突然の叱責であり、何か唐突な印象を受けます。異邦人に対して、神の国の秘密を知ることの困難さを語り、弟子たちには、神の国の秘密は打ち明けられると言っておきながら、すぐに続いて、彼らの無理解を責めているからです。

続く 14 節から 19 節では、最初の種蒔きの譬を分かりやすく説明を加えています。

ただ、この説明の箇所は、イエス様自身の言葉ではなく、当時新しく生まれていた原始キリスト教団のイエス様の譬に対する理解を表わしていると考えられています。

以上が、今日私たちに与えられた御言葉です。

私は、立川教会の皆さんを見ていて、正直に思うところがあります。

それは、今日の譬で言うのでしたら、良い土に蒔かれた種の譬が思い浮かぶのです。

これだけの、猛暑を超えた酷暑の中を、それでも礼拝に集い、本当にひたすら御言葉に忠実に生きて行こうとしていることです。

母は、2 歳の姉を後ろに背負い、1 歳の姉を前に抱き、両脇に野宿用のゴザと薄い布団を抱え、両手にはリュックなどを持って引き揚げて来ました。ほとんど着の身着のままの状態であるにもかかわらず、受洗した時に贈られた聖書と讃美歌を手放すことはありませんでした。

私は、今日ここに集われている皆さんに、ただひたすら主イエス・キリストの十字架を仰ぎ見、その後に従い行く姿を見るのです。

この私たちの歩みを、神様が祝福しないはずはありません。

但し、体調には、くれぐれも、普段の 2 倍 3 倍も気を付けていただき、決して無理をすることなく、お互いの信仰生活、教会生活を覚え、支え合い、励まし合いながら、それぞれに与えられた旅路を歩んで行きたいと思います。

祈りましょう。